

受難節第6・棕櫚の主日礼拝説教要旨(4月13日)

『ろばの子に乗って』

ヨハネによる福音書 12:12-19

早川 真牧師

ろばは荷物を背負い、一日中でも同じところを回るほど従順に人に仕える動物です。イエスはこの時、ろばが荷物を背負って歩むように、人の罪をその背に負って、十字架にかかるためにエルサレムに入られました。

人は誰かに攻撃され、傷つけられた時、とっさに同じように攻撃し、相手を傷つけてしまうことがあります。相手が力を持ち出して来たら力で対抗しようとしみます。しかしそのような時、私たちは、ろばではなく馬に乗っています。今朝の個所に出てくるファリサイ派の人々はまさにそうでした。彼らはイエスを敵視し、殺そうとしていました。それはイエスが彼らの偽善を公に批判されたからでした。彼らはそれを攻撃と受け取ったことでしょう。しかしイエスは、彼らが自らの権威を保つために弱い者を圧迫している状態から悔い改めて、互いにへりくだり、仕え合うものとなるように促しておられたのでした。しかし彼らの心はそれを悟らず、イエスを十字架につけるように群衆を扇動し、群衆もまたイエスが自分たちの思ったような王でないことを知った時、ホサナという叫び声は、数日のうちに十字架につけろという叫び声に様変わりしたのでした。しかしイエスはそのファリサイ派の人々や群衆の罪をも背負うために十字架に向かわれました。イエスの勝ち得られた勝利は、罪と死に対する勝利であり、イエスの与えられた平和は、力によってではなく、互いにへりくだり、仕え合うことを通して実現する平和でした。

次週はいよいよイースターです。私たちは今一度、ロバの子に乗ってこられる、この私たちの救い主の姿を心の内に思い起こしたいと思います。そして互いにへりくだり、仕え合いつつ、共に歩んでまいりたいと思います